

人生の決断

印西市立西の原中学校 二年 川田 小暖

私は四月から二年生になりました。後輩ができたり、新しい友達ができたりして毎日がとても楽しいです。でも、私には不安があります。将来のことについてです。正直なところ、私が大人になっている姿は想像できないし、高校生になった姿も想像できないです。自分が将来どんな職業についているのか、どんな人に囲まれて過ごしているのか、どんな大人になっているのか。進路にだって不安はあるし、周りの大人はみんな「あと一年あるから大丈夫だよ。」と言うけれど、友達の中にはもう進路を決めている人だっています。一年後、友達に置いていかれていく未来しか見えません。自分が今目指している職業も、未来ではA Iが担っているかもしれない。自分がちゃんとした大人になれるのか心配です。

そもそも、大人ってなんですか？

何をしたら、大人になれるですか？

本当の大人って誰ですか？

理想とする大人は、この世界にいるのでしょうか？

私は疑問に思って、父にこのことを話してみました。

「ねえお父さん、大人ってどうしたらなれるの？」

「どうしたんだよ。急に。」

私はこれまで考えていたことを話しました。自分の未来が想像できないこと。大人はどういう人なのか分からないこと。一通り話し終わると父は、はははっと笑って答えてくれました。

「いいか、小暖。大人っていうのはな、案外なんとなくでもなれるんだよ。」

えっ？と思った私は、更に詳しく聞いてみました。すると、父は自分が社会人になった時のことを話してくれました。

「俺はな、建築系の専門学校を卒業したんだ。それでもなかなかそっちの仕事に就く気にはなれなかったんだ。就職先が決まってなかったんだよ。ある日、お父さん

がやってる居酒屋に久々に帰ったんだ。あー、お父さんは『俺の』お父さんだから、お前にとってはおじいちゃんな。」

父はとても酔っていたので、饒舌でした。

「それでとある社長さんが飲みに来てたんだよ。偶然、偶然。お父さんがその社長さんと話してたんだ。んで、『専門学校を卒業した息子がいるんですよ。就職先が決まってないんです。』ってなぜか俺の話になったんだ。そうしたらお父さんが俺を呼んだんだよ。社長さん、なんて言ったと思う？『君、私の会社に来ないか？』って言ったんだ。今考えたら本当にありえないな。それで、俺の就職先が決まったんだ。でもその会社が潰れてな。えーと何年前だっけ。兄ちゃんが幼稚園の頃だから、十五年くらい前か？それで途方に暮れていたら、友達が『それなら俺の会社に来ないか？』って言うてくれて、しかも社長に紹介までしてくれたんだよ。それが今働いてる会社。まあこの出来事で運を使いきったのか、今は色んな病気にかかっているけどな。」

はははっと笑い、父はグラスに入っていた酒を飲み干しました。グラスの中の酒が電気に照らされて輝いていました。

「だからそんなに張りつめなくても、人生っていうのは案外なんとかなるぞ。俺みたいにトントン拍子にうまくいくって訳じゃないけどな。」

「へ・・・。」

なんだか壮大な話を聞いた気がしました。

「あとお前が言った、『大人はなにか』だな。皆は大人は自立ができて初めて大人になる、とか酒が飲めるようになったら大人になるとか言うけどな、実際は誰も分からないんだよ。誰も大人になる方法を知らないんだ。自分は大人だって思っている人が実はまだ子供だったり、その逆もある。大人っていうのがなにか皆知らない。ただ、大人っていう肩書きがあるだけ。あー、つまりな。」

父はここで姿勢を正しました。

「自分の未来が想像できなくても、とにかく一生懸命生きること。そうしていればきっと大人になれる。俺の人生が、そう言ってるんだよ。」

私は衝撃を受けました。そんなに軽く考えている人がいるなんて！でも、父の話を

聞いてなんだか元気になった気がしました。同時に自分の将来に対する不安も、少し軽くなった気がしました。父の話から、生きていたら必ず良いことがあるということ、そして一生懸命生きていたらきっと大人になれるということ学びました。私の将来の夢にも自信をもつことができました。私の人生は決して父のようにうまくいくとは限りません。もしかしたらこの先、人生を大きく左右する出来事や、とても大事なことを決断すべき場面があるかもしれません。その時私はどんな事を考えるか分かりませんが、父の言葉を思い出して生きていこうと思います。

どうか、父の言葉が私の人生を照らしてくれますように。